同じクラスの男の子にヌードモデルを頼んだ女子大生の話。途中で勃起しちゃって・・・

美大の卒業制作展まであと2ヶ月を切っていた。私のテーマは「力強い男性の肖像」。ただの筋肉質な人体ではなく、静かに溜め込まれた力、脆さと強さが同居するような男性像を描きたかった。でも、何度スケッチを重ねても、キャンバスに落とす線がどうしても薄っぺらく感じる。模型や写真、ネットの参考画像では足りなかった。生身の体

温、微かな震え、息遣い、皮膚の質感、そして何より「今、ここにいる」という現実感が必要だった。

同じクラスの貴史に声をかけたのは、授業後のアトリエで、いつものように失敗したデッサンをゴミ箱に叩き込んでいたときだった。

「ねえ、貴史。卒業制作のモデルになってくれない？どうしても男性の身体が上手く描けなくて…」

貴史は背が高く、肩幅が広く、Tシャツの下に隠れている胸板や腕の筋肉は、遠目でもはっきりわかる。まさに私が求めている「力強い男性」の条件にぴったりだった。

「……俺？ ヌードで？」

私は頷いた。曖昧に誤魔化しても仕方ない。

「うん、全裸でお願い。力強いポーズを取ってほしいの。どうしても……生の体が見たいんだ」

貴史の耳が一瞬で赤くなった。視線を床に落として、長い沈黙。指先で鉛筆をくるくる回しながら、ようやく口を開いた。

「……無理だろ、そんなの。恥ずかしいし」

「お願い。もう他に頼める人いないの。卒業かかってるんだよ。私、本当にこれで描きたいの」

私は両手を合わせて頭を下げた。必死さが伝わったのか、彼は深いため息をついて、視線を上げた。

「……卒業制作のため、ってこと？」

「うん。本当にそれだけ。変な意味じゃないよ。約束する」

長い間、彼は黙っていた。やがて小さく頷いた。

「わかった。一回だけな」

約束したのは次の土曜日の午後、私のアパートの一室。6畳の部屋をアトリエ代わりに使っていて、北側からの柔らかい光を計算してイーゼルを置き、キャンバスを立

て、照明を調整した。貴史がやってきた。グレーのTシャツに黒いジーンズを着ている。

「じゃあ……始めようか」